

研究室彙報

眞宗學研究室

眞宗學會

△五月六日(水)新入生歡迎會

午後三時、第一教室に於て、本年度第一回の總會を兼ねて、新入會員廿餘名の歡迎茶話會を開催す。大須賀主任教授を初め、教授學生多數出席し、非常に和やかな空氣の中に、年々の學會の隆昌を喜ぶと共に、大いに會員各自の自重を知らされたことであつた。

△五月廿日(水)例會開催
“信の對象について”

研一 禿 義誠君

佛敎學研究室

佛敎史學會

△例會(卒業論文發表)

時 二月二日(土曜日)午後一時開會—午後六時閉會

處 於第十一教室

出席者 松本文三郎教授以下大屋、日下、西本、河西、

研究室彙報

諏訪の諸教授並に卒業生、奥村、堅田、小島、中島、深溝、甘蔗の六君及び學生等十名出席
卒業論文及發表者

明治初年の護法運動(特に佐々木祐肇に就て)

奥村 亨君

長島一揆に就て

堅田 潛君

覺如上人の研究特に敎權確立に就て

小島 秀月君

北國に於ける一向一揆に就て

中島 彰慶君

鎌倉初期の淨土敎と末法思想

深溝 達也君

道宣の支那戒律史上の地位

甘蔗 圓達君

尙、當日御出席の松本教授以下大屋、日下、西本、河西、諏訪諸教授より、各その專攻せられる方面より、非常に有益なる御注告と、深き暗示とを與へられた。吾々、學生一同の誠に感激し、光榮とする所であつた。

△卒業生送別會

時 二月二日(土曜日)午後七時より

處 於也阿彌席

出席者 松本、大屋、日下、德重、諏訪の五教授及研究

科佐々木正緣氏外學生十名 (聞谷)

印度佛敎學會

大谷學報 第十七卷 第二號

一九二

△五月十三日(水曜)會議室に於いて第一回會合を開く。

右發起者 松本文三郎 鈴木貞太郎 赤沼智善 寺本
婉雅 泉芳璟 細川憲壽 山口益 林五邦 西尾京雄
龍山章眞 諸教授 平松友嗣 舟橋一哉兩氏 足利演正
高田良信 新田西麿 弓削須惠彦 研究科學生及び學部
學生有志

當日出席者 鈴木貞 山口益 松原 日野泰 山口光
林 西尾 龍山 富貴原 諸教授 平松 舟橋兩氏及び
研究科學生、學部學生等約四十名。初めに此の學會を結
成するに至つた經過の報告ありて、鈴木貞教授より印度
佛教に關する感想があつた。次いで協議に入り左の規約
を決定した。

印度佛教學會規約

第一條 本會ヲ印度佛教學會ト稱シ、事務所ヲ大谷大學
佛教學研究室內ニ置ク

第二條 本會ハ印度佛教ニ關スル諸般ノ研究ヲナスヲ以
テ目的トス

第三條 本會ノ會員ハ本會ノ趣旨ニ賛同スル大谷大學教
職員、學生、同窓、ソノ他ヲ以テ組織ス

第四條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、毎月一回例會ヲ開ク

二、隨時必要ナル事業ヲ行フ
本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事 二名

理事ハ印度佛教學ニ關係アル講座所屬ノ教授中
ヨリ二名ヲ推シ、會務ヲ總理ス

二、委員 二名

委員ハ印度佛教ヲ研究スル學生中ヨリ研究科一
名學部二名選出シ、理事ノ同意ヲ得テ事務ヲ處
理ス

三、理事及び委員ノ任期ハ一箇年トス。但シ
重任ヲ妨ゲズ

第六條 會員ハ會費トシテ年額五拾錢ヲ納ムベキモノト
ス。會計事務ハ委員コレヲ管掌ス

因に鈴木教授の感想録は大略次の如きものであつた。

「大谷大學に於ける印度佛教の研究は、遠く明治の中期、
南條笠原兩師が印度佛教研究に一つの時期を劃するやう
な功績があつて以來、原典研究の道が開拓せられて、印
度佛教の研究は、大谷大學の學問的一特長を爲してゐる
觀があつた。南條師の三藏目錄、梵文法華經の出版、笠
原師の俱舍論疏の研究、泉教授の梵本楞伽經、金光明經
訂、寺本教授の西藏に關する幾多の功績、赤沼教授の漢

巴四部四阿含互照錄及び印度固有名詞辭典、近くは山口益教授の中邊分別論疏の研究等、舉げて行けば、まだ幾つもあるであらうが、これらはその著しい成果であらう。

これは實に、南條・笠原兩師を先德に有する學流の、自ら至ところで、印度佛教の研究は大谷大學に於いて、學問的潮流をなしてゐることが分るのである。勿論印度佛教の研究と云ふても範圍が廣いので、細かく分類すれば様々な傾向を生ずるのであるが、全體として印度佛教の研究と云ふことが、一學流をなしてゐると思はれる。南條、笠原兩師は故人となつてゐられるその他の諸が、師は皆健在であつて、それに若い西尾龍山の諸師もゐられることであるから、將來この方面の研究は益々發展してゆくことであらうと思ふ。

大谷大學が大學と云はれながらには、何か學問的特長を持たねばならぬ。眞宗を研究する上にも、大學特有のものがあつてよい。眞宗以外のことも、學校としての特色があるべきである。即ち佛敎學の研究にしても、他の追隨を許さないものがあるべきである。たとへば、佛典の研究に於いても只世間の眞似ばかりをせず、自分から世間を指導するような學問をしたいものである。つまり何かの方面で、大谷大學に行かぬと本當に出来ぬと

云ふようなものを、一つか二つ學問研究の上に有ちたいと云ふのである。それは唯異を樹てると云ふ意味ではなく、本當に一つの識見を持つて居て、それから獨自性を發揮させるものである。この方面からも、日本の偉さを世界に現はしてゆきたいものである。私は大谷大學の印度佛教研究をかう云ふ意味に於いて見てゆきたいと思ふ。

學者と云へば、眞理を研究する人々であるから、お互に協同して行かれる筈であるが、學者程感情の疎通がうまくゆかぬ者は少ないと云ふのは、まことに妙な話である。學者以外の世界にゆくと、割合うまく共同して仕事をやれるところから見ると、それは學者が言語文字の研究をするためかもしれない。この言葉と云ふものが問題になると思ふ。たゞ言葉だけを研究するのが、いけないことであらう。考ふべきである。それはさうとして、仕事らしい仕事が出来するには、幾人の人が協同してかゝること、即ち人の和がないと、仲々難しいと思ふ。今此の學會が作られたと云ふことは、かう云ふ意味からまことに慶賀に堪へないことである。物事は大い初めが華かであるが、終りを全うするものは少ない。此の會も龍頭する次第である。有終の美を遂げられることを切に希望いと思ふ。以上

支那學 研究室
東洋史

東洋史學會

△昭和十一年一月卅日(木曜日)自午後三時於應接室例會開催。

“唐代初期の土地問題に就ての再考察”

學部三回 福岡 明成君

羽田、諏訪、野上、諸先生、學生約十名出席。

なほ、當日自午後六時於千也卒業生送別會を開く、諏訪、野上諸先生出席。

△二月八日自午後一時半於第十一教室例會開催。

“金朝の經濟問題の一端”

學部三回 黒田 純一君

△二月二十九日自午後一時半於應接室例會開催。

“宋代譯經史の研究”

學部三回 岩井 読亮君

△五月六日自午後三時於應接室例會開催、左の講演を聞く。

“漢代州郡の研究に就て”

東方文化學院京都研究所 森 鹿三先生

秋貞、野上兩先生、研究科福岡氏、學生十數名出席。

支那學會

なほ、翌五月七日自午後六時於鳴瀬新入生歡迎會を開く。秋貞、諏訪、野上諸先生、學生全部出席。

△三月二十二日藝林聚英第二號發刊

書香魚記後、蓉花説(課題)

鳴道集説を讀む

王充の自然哲學について

離魂記の研究

詩の六義と二南に就いて

孟子の王道思想に就いて

賈誼の治安策に就いて

傳習錄に表れたる王陽明の良知説に就いて

湯淺 廉孫

明の郭鄖に就いて

荀子の正名に就いて

封禪の起源に就いて

儒家より見たる祭禮の意義

附錄 汲古閣本十三經注疏編目卷數表

△四月二十五日夕 鳴瀬にて支那學會懇親會開催、關係

諸教授をはじめ全會員出席、支那學を語りつゝ、春宵

本田 成之

尾野田 倫

河合 英美

西田 祐真

木村 正

玉井 融

戸崎 景明

上村 幸次

濱田 弘

中山 忠

松江 雷陽

一夕を盛會裡に過す。

△五月四日 支那學會定例評議會を支那學研究室に開き、全會員出席の上、本年度委員を會長より指名せられ、更に一層の奮闘努力を申合す。

哲學研究室

西洋哲學會 倫理學會

△新入會員歡迎會

時 昭和十一年五月十二日(火)午後六時半

處 森永キャンデーストアー

出席者 鈴木弘、大友、正木、の諸教授、研究科學生、學部學生全部。

鈴木先生より日本哲學に關する御話の後、懇談す。

國史學 國文學 研究室

國文學會

△五月一日(金)午後一時より、神泉苑に狂言を見學。

每週、金曜日午後三時より輪讀會。當分、更級日記を使用。

研究室彙報

國史研究會

△四月十五日 「尋源」第五號を發行す。

本年度の「尋源」交換雜誌

弘仁文化之新研究(夢殿第十一冊)

△大阪朝日新聞社主催飛鳥文化展並豐公展見學

日時 四月十九日午前八時半京都驛發

場所 朝日會館。大阪城

出席者 德重教授、木村、蒲原先輩以下學生九名、德重教授の説明にて推古佛及び聖德太子研究資料、玉蟲厨子の模造、秀吉の文書等を見學す。

大阪城にて利休文書、聚樂行幸記念品、胡蝶縫

秀吉陣羽織、金鍋、屏風等見學す。

△京都博物館見學

日時 四月廿四日午後一時半より

出席者 德重教授、蒲原、木村先輩以下學生廿名、博物館土井氏の説明により、桃山屏風、本法寺藏狩野山樂筆と傳ふ唐獅子の圖等、桃山時代の藝術的作品を見學す。

△新入會生歡迎會

日時 五月十一日午後六時半より

場所 祇園八百文に於て

講演 國史研究法に就いて

德重 教授

一九五

△葵祭特別拜觀

日時 五月十五日零時半

場所 上賀茂神社集合

指導 德重教授

昭和十一年度 大谷大學學部開講學科目

及講義題目

學科目	教授	每週 時數	單位	講義題目	備考
眞宗學概論	大須賀 二	一	眞宗學概論		
眞宗學第一講座					
眞宗學	花山 二	一	愚禿鈔		
同	可西 二	一	存覺上人とその教學の考察		
同	大須賀 二	一	演習 三經往生文類		
同	大須賀 二	一	講讀 教行信證 教卷ヨリ		
同	河野 二	一	講讀 教行信證 信卷ヨリ		
眞宗第二講座					
眞宗學	柏原 二	一	日本初期の淨土教		
同	安井 二	一	散善義「三心釋」の研究		
同	加藤 二	一	演習 選擇本願念佛集		
同	加藤 二	一	講讀 觀無量壽經		
同	本多 二	一	講讀 往生論註		
佛敎學概論	赤沼 二	一	佛敎學概論		
佛敎學第一講座					
原始佛敎學	赤沼 二	一	根本經典の研究		
同	赤沼 二	一	心意識論		
同	寺本 二	一	古代西藏佛敎		
同	茜部 二	一	演習 阿毘達磨俱舍論頌釋疏		
同	林 二	一	講讀 雜心論		
佛敎學第二講座					
大乘佛敎學	小島 二	一	唯識敎學史		
同	山口 二	一	提婆の中觀學說		
同	日野 二	一	三論玄義		
同	山口 二	一	演習 梵文月稱 佛敎學第四		
同	小島 二	一	講讀 中論註 講座ト共通		
佛敎學第三講座					
大乘佛敎學	山口 二	一	天台敎學		
同	本多 二	一	本門思想の發達		
同	花山 二	一	講讀 五敎章		
同	松原 二	一	講讀 大乘起信論義記		
同	本多 二	一	講讀 天台四敎儀集註		
佛敎學第四講座					
大乘佛敎學	鈴木 二	一	禪宗思想史の初期		